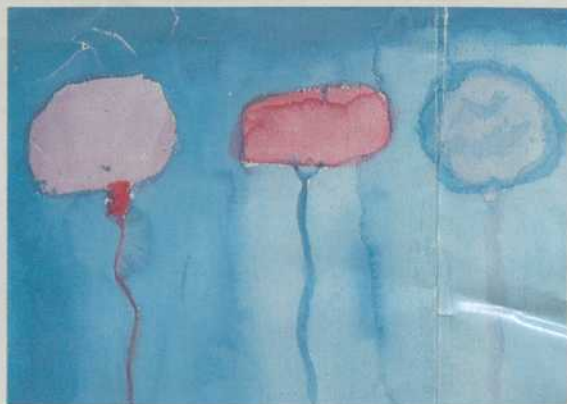




宝那が小学校1年生のときに描いた作品『3つの風船』。

娘よ

李 禹煥

題字文絵



リウファン
一九三六年、韓国慶南生まれ。多摩美術大学助教授。
パリ青年ビエンナーレ、カッセルドクメンタなど
国際展に出品。東京、パリ、ジュネーヴ、ドルフ、
ミラノなどの美術館、ギャラリーにて個展多数。
東京国立近代美術館賞（七七年）、他。
ポンビドー美術館など各国の美術館にコレクション。

美那、寿那、宝那ちゃんたち。ぼくに、三人も娘ばかりの子供がいるなんて、途方もない話に思える。多分、天性に違いない。から、こんなにもたくさんのお子、バチが当たったようでもあって、いずれめて、にしても恥ずかしくてたまらぬ。

それにしても、妻のお陰か、君たち自身の力によってか、スムーズに育ってくれたので、内心ほっとしている。これから頑張つて、素晴らしい成人になってくれるよう頼む。ぼくのような、自分のことしか知らない非家庭的な人間に、君たちのことを語る資格はない。ただ、これからの時代を生きていかなければならぬ女性について、ひとりの男の真剣な発言として、ちょっと聴いてもらいたいことがあるのだ。

美那ちゃんは、芸術論を勉強したいらしいね。我が強いくせして人の前に出たがりやだから、評論家にもなるつもりか？ しかし、ものを見抜く力、芸術が解る心を育てるためには、まずいい大学、いい先生の門下に入るよう努力することだろう。寿那ちゃんは、心優しく人の世話をやくあまり、へとへとなってしまう性格、人を助ける薬剤師に憧れるのはいいが、損なたちだね。蓄えの多い人のみが他人に分け与えることが出来ると思うから、まず自分の夢とエゴを大切にしたい。宝那ちゃんは、考え方や仕事はユニークで可愛いが、いつまで赤ちゃんぽく甘えるつもりだろう。誰にも頼らない、もつとちやっかりした欲深い子になってくれなと困る。よく聞つて、



昭和54年、自作の前で。左から寿那(10歳)、美那(13歳)、宝那(6歳)。

人ごんなことを言いながらも、今の君たちの顔から、将来の姿を想い浮べることは難しい。どんな女性に、何の職業に就く人間になるのか、ぼくには見当がつかない。それにしても、結婚したり、子供を産んだりすることはいいとして、いわゆるいいところ(?)へ嫁いで、いい嫁さんになる、なんてことだけは勧めたくない。バカみたいなシアワセになるよりは、苦しくても自分を生きていくことの出来る人間になってもらいたい。ともかくこれからは、女性にとって、頼もしく生甲斐も大きい、その代り苦勞も多い、大変な時代がやってくる。端的に言えば、男を頼りにして生きることはクズになることであり、そもそもそれは、もはや不可能に近い。その上、もしかしたら、男や子供までも養いながら、自分ひとりの力で生きていかなければならぬかもしれない。くさっても、この社会は男のせいだ女が不幸になっている、なんてことは言わないこと。どんなハンディがあっても、道は自分で切り開くとき、そこに生きる美しさやよろこびがあるだろう。

そのためには、自分に見合う専門的な知力をしっかり身に着けなければならぬ。そして、自分の考えを活かす仕事に、打ち込めるよう努力するしかない。いやにキンキンするウーマン・リブは嫌われるが、空っぽの白痴女もまたバカにされる。女性の理想的な未来型は思い描けないが、ぼくが魅力を感じるの、いつもなにかの世界に魅せられて仕事の出来る、賢くて感性豊かな女なのだ。